

1. はじめに

私は中学校の実習に行く前に目標としていたことが3つある。

一つ目は生徒理解力である。今までに小学校の教育実習やボランティアなどで、小学校の経験は多く積んできたつもりである。中学校はバレーボールのコーチングをしているが、関わっているのはほとんどが部員であり、その他の生徒たちとの関わりには自信が全くなかった。そのため、まずは中学生に自分から積極的に関わりを持ち、自分の中に生徒というイメージをつかもうと考えた。初日から生徒との交流を多く持ち、また授業観察の中でK中学校の生徒の実態について知ることが、生徒観を持つことができ、その生徒観に合わせた授業を考えることができると思った。また授業に生かすこと他に、中学生と言え、思春期の真ただ中であり、生徒理解の上では難しい時期でもあると考えていたので、その難しさに挑戦し、一人でも多くの子の心に寄り添いたいと思った。自分が人間的にも、教育者的にも、幅を持つために大切なことだと自覚していた。

二つ目は授業実践力である。一つ目と同様、私は小学校での経験はあるが、中学校の授業においては大学生活の中で、全く覚えがない。指導案を書いたこともほとんどない。そのため、この授業実践が最も自信がなかった。まずは、授業観察に徹することを計画した。中学校の授業、生徒の授業態度、先生の指導などに目を付け、自分の中に中学校の授業を具体化していくことなどだ。また実習2週間前から、指導教諭の先生と打ち合わせを行い、同時に教材研究にも打ち込んだ。授業を行う上で、自分の中に大切にしたいテーマは明確に持っていた。生徒観を大切にしたい授業と小学校教育のアイデアを取り入れることだ。生徒観を大切にしたい授業はボトムの子も分かる子も、発展的な学習ができる子も学びを得る授業につながると考えた。また中学生が飽きない授業、知的好奇心が湧きあがってくる授業、楽しい授業も生徒観を大切にしたい授業だとしていた。そして小学校教育の良いアイデアを取り入れることは、分かる授業を展開する上で良いヒントになる。中学校の授業への転換が急過ぎると、学習に付いていけない生徒は必ず生まれる。そこで、小学校のような授業スキルや流れ、指導を用いて、分かる授業を展開しようとした。今まで自分が学んできたことを生かす場にもなることも自覚していた。他にも多くの先生方の授業を見ることや、質問することなどを計画した。

三つ目は“中学校”を知ることだ。これは一つ目と二つ目の目標と被るところもあるので、多少省くが、要点だけまとめると、中学校の学校経営や学級経営、教育課程などを小学校と比較しながら、中学校についての概要や中身を知ることだ。小学校の教員になりたい立場だが、今日小中連携や中一ギャップのための小中一貫教育などが叫ばれているため、教員には幅の広さが求められる。私は小学校教育を専門とするが、常に学び続け、幅の広い教師を理想とする教師像として持っている。そのためにも今回の実習は必ず有意義なものにすると意志を強く持って臨んだ。

2. 実習校の概要

私が実習に行かせてもらった市立K中学校は、二つの小学校の児童が中学に入学してくる。1組は4人の支援学級で通常学級の生徒は各学年2組から6組まであり、各クラス4

0人程である。3年生は市の取組により、少人数クラスを取り入れているので、各クラス25人程の8クラスである。学校の実態は“荒れ”というものが残っている。2、3年生の学力は市の平均より下であるが、1年生は平均より少し上である。私の印象としては、1年生は一般的な中学生、自分が育ってきた環境と何ら変わりのない中学生である。2、3年生に対しては非常にギャップを感じ、初めは少々戸惑った。

3. 生徒との関わり

ここでは主に生徒との関わりについて述べたい。場面ごとに分けて書いていくことにする。またこの内容は目標の1と関係している。

a. HR教室・授業クラス

まず自分のHR教室での関わりであるが、初対面の自己紹介のときに自分の特技であるボール回しを披露し、少しは気を引くことができた。また授業クラスにおいても、質問に答えたり、自分の趣味と関係したクイズを出したり、好きなアニメのものまねをしたり、いろいろパターンを変えながら自己紹介をしていきました。ここで気付いたことは小学生なら自分から興味津々に聞いてくるが、中学生はこちらから仕掛けないと何もレスポンスはないということだ。これも思春期ということが関係しているのだろうか、恥ずかしいのか、無関心なのか、自分から挙手することに対して周りの目を気にしているのか分からなかったが、新しい経験だったので、戸惑ってしまった。しかしあるクラスでの自己紹介のときに行ったものまねやあるアニメの大ファンということが一部で広がり、知っている生徒に学校で会う度にもものまねを要求されるようになり、教材研究と新しいものまねの習得を同時並行していたと思う。今となっては持ちネタが増えて、生徒に生徒との関わり方の術の一つを教えてもらったと感謝している。中学校の先生は授業においても、HRにおいても、話が上手いことや面白いこと、何か一芸持っていること、尊敬できることが必要だと実習でも分かった。それは生徒と関わる方法となるからだ。いきなり話をすることや深く関わることは思春期の子どもたちにとって抵抗があるだろう。その糸口として、またその個別に話すまでの関係作りとして、術が必要なのである。生徒の興味・関心事について知っていることでも良いので、生徒を知って寄り添うことから生徒指導は始まることを学んだ。また指導教諭の先生から生徒と関わる際に言って頂いたことは今も私の心にしっかりと残っている。それは「生徒のありのままを受け止めてあげてください」だった。私は生徒と関わる上で難しく考えていた。生徒について知って、背景なども踏まえて、関わろうとしていた。しかし、それも大切なことだが、2週間という短い中で自分には何かできるか。それは一人ひとりの生徒との交流を多く持ち、一人でも多くの生徒の話や言葉をそのまま受け止めてやることだった。それから私は気楽に緊張せずに、生徒たちと何気ない会話を進めていくことができた。

b. 部活動

私は母校で男子バレーボール部のコーチを行っているが、今回はその男子バレーボールが実習校になかったので、代わりに女子バレーボールを指導することになった。同じバレーボール指導には違いないのだが、女子生徒をバレーボール指導することはまた違うスポ

ーツを指導する身構えを持っていた。それは私が生徒に対して、男子には行えることと女子には言えないこと、できないことがあるからだ。勿論、初対面であるので、いきなり言葉数が多い指導はできない。それ以上に、男性教諭と女子生徒との間に壁があるように思えたのだ。スポーツは体を使うスポーツであり、時には生徒に触れて指導することもある。しかし女子生徒にはそんなことはできない。また深くも指導できないので、私は初め、非常に抵抗を感じていた。そんな不安を払拭してくれたのが、部員のみんなであった。部員達の元気な挨拶とバレーボールが好きな気持ちに心を動かされて、いつの間にか自分も声を出して、真剣に教えていた。こちらが声を出して、生き生きして練習を付けると、みんなもできる限り応えていたように感じた。やはりコーチングは相手のそのスポーツが好きな気持ちをできるだけ引き出してやるのが大切なのだと分かった。最後には部員達とハイタッチすることもでき、実習の中での一つの大きな収穫となった。しかし、良い所ばかり見えたのではない。女子生徒の部活にはその部活独特の課題があるようだった。顧問の先生ともこれを話題にして幾度も話していた。それは仲間関係である。気が合わない人がいれば排除するような言動を行ったり、女子同士は非常に気を遣うので、そのため思っていることをはっきり言えなかったり、自分のグループを作ったり、と難しい課題が山積みのようにだ。私はその課題に対して、先生と話し合うことしかできなかったが、先生が私のコーチング経験を頼って、私に相談して頂いたことは嬉しかった。それが直接的にこの部活のためにならなくとも、自分の経験が生かせることを知れて、嬉しかった。

4. 授業実践

授業実践は1年生を2クラス、2年生を3クラス担当した。ここではその二つに分けて、教材研究や授業について述べていくことにする。

a. 1年生

1年生の担当教材は『江戸からのメッセージ』（杉浦日向子）であった。江戸っ子の工夫された生活から物の豊かさと心の豊かさについて考える説明文である。担当クラスはHR教室である6組ともう一つは4組であった。6組の3回目の授業で研究授業が決まっていたこともあり、2年生の教材より重きを置いて、教材研究をしていった。

教材研究はまず、教材を自分がしっかり読み込むことから始め、何度も読み、この教材から自分は何を伝えたいのかという教材観を持つことにした。その後、教科書の指導書を読み、自分の構想と比較し、取り入れるところは参考にした。指導案の見本はあまりなかったもので、ほぼ自分で作り上げ、それを指導教諭の先生に何度も添削してもらいながら、そして授業での反省を生かしながら修正していった。その上で留意したことは多々あった。

それは生徒の中に授業において支援が必要な生徒が多かったことだ。7人ほどの生徒にはより分かりやすい言葉遣い、学習活動が求められていた。具体的に行った授業方法は、まず“待つ”ということだ。待つというのは授業準備や学習活動、静かになることをこちらが黙って待つということである。全員の足並みを揃えることは全員がスタート地点を同じすることになり、特に授業の導入においては最も気をつけた。足並みを揃えることと似ているが、視覚化と焦点化を心がけた。詳しく言うと、視覚的に分かりやすい板書、掲示物、何をやればいいのか簡潔に提示することだ。具体的には、単元目標を必ず授業冒頭に確認すること。そして、それに向かうための本時の目標を提示することである。この「単

元目標」と「本時の目標」は磁石付きのカードにして、毎回使うようにし、視覚的にも注目させた。またその目標はできるだけ短く、分かりやすくした。そして、今から行う学習活動を提示するときは一回で聞けるような雰囲気を作り、提示した。他にも今行っている学習が分かるように矢印のマークを板書に貼り、授業の過程が分かるようにした。自分の考えを書く活動の時には、書き方の見本となる型を幾つも提示して、書き始めが上手くいくように支援した。実物投影機と電子黒板を使い、授業に関係する絵を提示したり、授業に関係する実物を用いて生徒の興味関心を高める支援も行った。またぼろぼろになった草履を持ってきて、「みなさんならこの草履をどうしますか？」などと問いかけ、また「江戸っ子ならどうすると本文に書いていますか？」と言って本文を読みたくなる必要感を抱く流れを作りだした。視覚化と焦点化ともう一つセットにしたのが共有化である。作り手と売り手と直し手のイメージを持つために、教室にあるものでペアトークを行い、自己の考えを相手に伝えて、新たな考えに気づき、自分の考えを広げるねらいを持っていた。しかし、これについては時間を使い過ぎることや生徒観と合っていなかったこと、普段の学習スタイルなどの関係からやり切れずに終わってしまった。これはこれからの課題にしたい。

b 2年生.

2年生の担当教材は『盆土産』（三浦哲郎）であった。単身赴任中の父がお盆に帰省し、息子と娘と母（息子と娘からすると祖母）にえびフライをお土産として持って帰ってくるという田舎を舞台にした素朴な物語文である。担当クラスは3クラス。しかし、この中学校では国語科の時間を少人数授業にしているため、担当したのはクラスの半分の19人だった。この教材は私の教育実習の時間からすると、5時間中3時間までしか持てなかったため、3時間までは私が授業を行い、あとの2時間は指導教諭の先生にお任せする形となった。

教材研究の仕方は基本的には『江戸からのメッセージ』と同じだが、この『盆土産』という教材は指導書にも細かく書かれており、またネット上の指導案も色々あったので、色んな資料を参考にしながら、指導案をつくり上げていった。『盆土産』の教材研究において最も大切にしたい点は生徒の読む視点をイメージしていたところだ。生徒が目にするであろう言葉、心情、場面について読み深めていく指導案を書いた。勿論、教師側が読み込んで欲しい願いも込められているが、生徒の素直な疑問や感想を生かしたかったのだ。

授業において、生徒たちはまず初読の感想を書くのだが、普通はただ感想を書いて、登場人物やあらすじを整理するのが主な第一時の授業であろう。しかし、私は初読の感想のためのワークシートを制作した。そこには二つの項目を設けた。一つ目は不思議・疑問に思った場面について。もう一つは気に入った場面である。この生徒たちの素朴な思いを大切に、次回からの授業において、読み深めるところを生徒達にも提示していった。要するに、生徒達からすると自分が初回に気になったところを授業で扱われるので、必要感や意欲が湧くだろうと考えたのだ。勿論、先にも言ったが、これには予想や計画が前提としてあり、生徒が書いたことに全て合わせて授業を行うことではない。第二・三時の授業ではできるだけ生徒の名前を言って、「～さんが挙げてくれたことを取り上げます。」「～くんがここに気付いていました。」などと言って、生徒の思いを拾う授業を行った。

c. まとめ

二つの教材を研究し、それを日々の学校生活の中で実践していくことが非常に重たかった。最も苦労したことを挙げるなら、この指導案作りと授業実践であろう。現場の先生は学年を跨いで、また各クラスの授業流れの違いがあるにも関わらず、日々の授業をこなしておられることに感心を抱きました。また、小学校では各教科、外国語活動や道徳の時間までも計画し、実践することになるので、改めて教師という仕事の大変さを知りました。しかし、大変さを知ることは現場に慣れることの一步だと考えるので、この二つの教材を受け持った経験は実習の中でも自信となった。

授業内で苦労したことは、国語を学ぶ必要感や意欲をどのように持たせるかである。先生の発問と生徒の答えだけでは授業は進むが、内容に深まりがなく、理解できずに終わる生徒が多いだろう。まず、国語を好きな生徒が少ないということも分かった。国語への苦手意識、興味のなさも窺えた。これは小学校のときから引きずっているものなのかもしれない。そうだとすると、中学校で意識改革を行うことが中学校教師には求められる。反対に基礎の定着や学習習慣や意欲を身に着けておくことが小学校教師には求められる。小中連携の必要性もこの授業の中でも感じたことだ。そして私は授業中にできるだけワークや視覚教材や生徒観を大切にした授業を行った。それでも付いてこれない生徒はやはり多かったし、2年生の中には飽きていた生徒も多く見受けられた。日ごろの学習習慣にも要因があるが、まだまだ私の授業力・教材研究不足であったと反省している。生徒は素直な反応をしてくれていると考えると、私は自分のこれからの努力や可能性に楽しみを覚えることができた。教材研究や授業の時間は本当に楽しいものであり、子どもたちの成長を肌身に感じて分かることができる貴重な時間であるようだ。

5. 結び

この実習での目標である三つのことはどれも中途半端に終わってしまったようだ。なぜ達成できなかったか、それは心の余裕を持てなかったからであろう。これは現場に入ってから同じことが言えるだろう。今、現場の先生には児童生徒を細かく見取る余裕がないとまで言われている。それは学習指導と生活指導の両方に追われ、また保護者対応や校務分掌、その他の雑務にも今では細かく仕事をされていることにより、時間と心、体のゆとりが持てていない。そんな先生を私はこの実習の中で何人も見た。その度に胸が苦しくなった。先生たちは望んで先生という職業に就いている。一般的な就活における職業とは違うと考える。そんな意志ある先生が皆苦しんでいる。その苦しみを社会は取り上げてくれない。いつも不祥事や子どもの事件、指導力不足などの注目事に反応している。社会で、もっと子どもたちを、そして先生をサポートする仕組みができればいい。地域の方、小中連携、その他ボランティア、支援員などがキーワードになってくるが、まだまだ定着度は低い。実習校においても学生のサポートはあった。しかし、地域の方と出会う機会はまずなかった。地域の子は地域で育てる。地元の子は地元で支える。という教育への意識を大人たちが学校と協力して取り組むべきである。学校を教育のセンター的役割として、各地域が働きかけることだ。実際、コミュニティースクールでは少年の補導件数や傷害事件は激減している。優しく温かい地域こそ、子どもも優しく温かく育つ。たった2週間の実習であったが、自分の課題と教育課題がたくさん見えた期間であった。